

[エッセイ] 私のドイツ体験

著者	森 ゆかり, 清水 のり子, 丸山 恵里香, 野中 梨栄子
雑誌名	独逸文学
巻	50
ページ	223-232
発行年	2006-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/12884

[エッセイ]

私のドイツ体験

1. 森 ゆかり：ワイン醸造学

ヴィースバーデンからコブレンツ方面に向かって車を走らせると、蛇行するライン川に沿ってどこまでも広がるブドウ畑を見渡すことができます。朝からブドウを収穫する人やブドウを集めるトラクターが溢れ、楽しそうな笑い声があちこちから聞こえます。昼食のスープを配給されると、地面に座ってそのまま食べたり、またワインを飲んだり。毎年10月にあちこちで見られる典型的なラインガウ地方のワイン用ブドウの収穫風景です。朝8時からバスにのせられて畑に向かうと、一人ずつバケツとはさみが手渡され、手作業で収穫されたブドウはトラクターに積まれてそのままプレス場に運ばれます。それから夜10時まで、遅いときは深夜までブドウ処理に追われることもあります。全身ブドウ果汁や土でべとべとになって家に帰ると、くたくたでそのまま眠り込んでしまうことも。そんな収穫時期は1年でもっとも大変だけれども、とてもエキサイティングで楽しい時期です。収穫時期が来ると、やっぱりワイン作りはおもしろいな、と実感させられます。

このラインガウ地方にあるガイゼンハイムというとても小さな町で私は今、再度大学に通っています。ここの大学は世界でも数少ないワイン醸造学 (Weinbau und Önologie) が勉強できる、研究所をかねた珍しい大学でもあります。私の専門学科は国際ワインビジネス (Internationale Weinwirtschaft) といって栽培学、醸造学とあわせて、マーケティングや経営学も織り込まれています。つまり大まかに分類すると、醸造学は生産側、国際ワインビジネスは取引側ということです。ワインビジネス科は醸造学科に比べて1年短く、3年で卒業でき (つまり卒業後はBachelorの称号)、そのカリキュラムは基本的な醸造、ブドウ栽培の知識からマーケティング経済、経営学まで幅広く、びっしりと予定が詰まっています。また、大学入学資格を得るために最低半年の研修、および学業中も外国

での最低8週間の研修が必須で、さらに毎学期休みには自主的に様々なところで研修する学生も多く、意識の高さをうかがうことができます。高校以来すっかり遠縁になっていた数学や化学も必須科目なので、しっかりとモチベーションを高めていかないとすぐ挫折しそうな、ハードな内容です。

そういう私も、関西大学にいた頃は自分がこんなドイツの田舎町でワインを勉強するようになるとは思いませんでした。将来、ドイツと何か関係のある仕事をしてみたいという希望はありましたが、特別な希望職もなく、将来の見通しはぼんやりともやのかかったままでした。そんな大学生活も終わりに近づき、就職活動をしているときに、ふと自分が何をしたいのか、ドイツ語以外に自分が何に対して興味を持っているのかということをもう一度じっくり考える機会があり、そうして、ワインの道に進むことにしたのです。それでも、また大学で勉強するつもりは毛頭無く、研修生として半年ほどドイツの企業で働いて、また日本に戻ってこようと考えていました。それから、ドイツの様々な飲料系企業に応募し、あるスパークリングワインの製造会社で研修できることになり、研修生活は大学を卒業してすぐ始まることになりました。こうしてすぐに始まった研修生活も、関西大学でドイツ語を勉強したことと、在学中にドイツに留学した経験が、大きな手助けになったことは言うまでもありません。在学中の留学は、ゲッティンゲンという町だったのですが、現在は関西大学の提携校として、夏休みの短期語学コースなどでなじみの深い町になっています。海外での一人暮らし、役所の手続きなど何から何まで初めてで戸惑っていたことが、もう一度海外での一人暮らしをはじめた当時とても役に立ち、スムーズに初めの引越し手続きを終えることができ、支障なく仕事を始めることができました。そうして、半年が経とうとしていた頃、当時の上司や現地で仲良くなった友達などからガイゼンハイムの大学に進学することを勧められ、進路のことで日本に帰ろうか残ろうかと悩んでいた私は、せっかくドイツ語ができてワインの産地にいるのだからもう少し自分の可能性を試してみようと思い、大学応募資格を得るため、上司に紹介してもらったワイナリーでさらに研修を続けることになりました。

ワイナリーでは主にブドウの栽培を手がけ、早朝から（時には朝5時

私のドイツ体験

から仕事が始まったことも…) 畑に出かけ、皆と一緒に働きます。ワイナリーでも日本人は私一人で、他の従業員の人たちと話をするときや説明を受けるときにはやっぱりドイツ語を勉強しておいてよかったとつくづく思いました。朝食、昼食も自分で作らなければならないし、休みも少なく、収穫時期は土日関係なく約1ヶ月休みが全くありませんでしたが、時間を見つけては仕事場の友達とご飯を食べに行ったり、ワインの試飲会に行ったりしました。そうして約10ヶ月のワイナリー研修も終わり、いよいよ大学に応募することになりました。関西大学ですでにドイツ語を勉強していたので、ドイツ語判定テスト(DSHやTesDaF)を受ける必要がなくそのまま入学することができました。そうして念願のワインを勉強するようになったのですが、関西大学でドイツ語の基礎を学び、現地の人たちとの交流を通して培ったドイツ語力のおかげで大学の授業も理解することができます。

今の私の生活は、大学でドイツ語を勉強したことや留学したことに助けられたことがたくさんあります。人それぞれ将来の目標は違いますが、ちょっとした事がきっかけで全く想像もしていなかったような道に進むことになったり、これからも何が起こるかわからないものです。それでも、今まで自分がやってきたことというのは多かれ少なかれ今の自分を支えていると思います。私が今大好きなワインを、ワインの有名な産地ドイツで勉強できているのも、ドイツ語を勉強したおかげなのです。

2. 清水 のり子：ドイツ留学—想定外のドイツ語

„Schmeißt du ihn bitte rein!“

„Ja, wen?“

„Ihn... Den Schlüssel!“

„Ach, so. Gut. ...Wo ist der denn?“

„Da! Auf dem Tisch, neben dir!!“

„...Den meinst du?“

„Na klar! Was denn sonst?!“

木屑のけふるWerkstattでStefanが洋服ダンス用の板を組み合わせながら、私に声を張り上げる。そんなに大声で言わなくても聞こえている。私の聴覚は正常だし、彼のバイエルン訛りの発音も、彼が発した文の意味も理解している。では何が足りないのか――

私はドイツ中西部ルール地方の商業都市、ドルトムントに程近い町ヴィッテンにあるシュタイナー教育研究所 (Institut für Waldorfpädagogik) にて教育養成課程の最終学年に在籍している。人間、大抵の事は3ヶ月もすれば慣れるというが、3年半のドイツ生活の中で未だに慣れないものがある。冬の長さとラクリッツ (ガム状の飴の一種) と冒頭に載せたような状況である。前のふたつについては日本人の方にはおそらく説明する必要がなかろう。3つめの問題はドイツ語における名詞の機能と概念の違いである。冒頭の会話例にあるように、二種類の名詞に関する言語感覚の違いが私を取り巻く円滑なコミュニケーションを妨げている。

まず一つには、ドイツ語では英語のitと違って、物を表す際にもその名詞のもつ性に基ついた代名詞が用いられる点である。これが原因で時折、瞬時の理解に支障をきたす。急に人差し指をドア付近に向けたドイツ語話者に „Hast du sie/die schon mal gesehen?“ とたずねられ、マヨルカみやげの芸術的な壁掛け時計を通り越してドアの向こうに首を伸ばすような経験をした事のある人は私だけではないのではなかろうか。 „Die ist von meiner gestorbenen Mutter...“ とつぶやいた友人の言葉に背筋が凍った。あの時、彼にもう一度何を指さしているのかを質問していなければ、以後二度とその家におじゃます事はなかったであろう。

そして2つ目のポイントは、Stefanによって „den Schlüssel“ と名づけられた物の正体である。研究所内の作業所に立つ私の脇には小さなテーブルがあった。その上にはコーヒークップとタオル、そして六角形の穴を持つナットを締めるときに使う工具、俗に言う「六角レンチ」の3つが置かれていた。私は何か用事で彼のそばに立っていたのだが、急ぐ事もないので彼の作業がひと段落するまで待っていたとした、まさにその時、彼から例の言葉 „Schmeißt du ihn bitte rein!“ が足元から聞こえて

きたのである。シュタイナー学校の建物や備品はほぼすべてが手作りであるので、当研究所には学校専属作業員養成課程も設けられている。ちなみにこの学科に属する人々はとりわけ手先が器用で、とりわけ言葉使いがたのもしい。日常的な会話には „kriegen“, „fressen“, „schmeißen“ の3語をうまく活用している。話を戻すが、まず先述の要領で私は ihn を「彼」だと思い込み、その後彼が欲しいのは „den Schlüssel“ だと知る。Schlüsselとは鍵である。日本人にとって鍵とは扉などの開閉に使うものである。他に抽象的意義として物事の解決に必要な要素が挙げられる。残念ながらそれらに適応するものはテーブルの上にはない。その時点で私の中に、六角レンチを指しているのかもしれないという発想は微塵もなかった。最後は消去法で六角を手を取った。その場にもしお椀 (Schüssel) があれば、性は違うが迷わず手渡していただろう。手元の辞書 („Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache“ Langenscheidt社発行) によると、ドイツ語話者にとって Schlüssel とは、「鉄でできていて穴に差込み、回して使用するもの」を指すらしい。シュタイナー教育の提唱者、ルドルフ・シュタイナーはこういった語感の形成について重要視している。シュタイナー学校では第1学年から母国語の授業と合わせて2つの外国語を教える。それは別段、将来国際的な職業につけるようにという願いからではない。むしろ極端に言えば、子供達はその外国語を物質的な意味で習得することを目的としてはいない。6~7歳からの子供達が他の言語にも同時に触れることによって、物事に対する捉え方を母語の感覚のみで固めてしまうのではなく、より広い視野に立って自由に世界を感じる事ができる人間へと発展することを目指している。シュタイナー自身が挙げた例として、英語の headは頭という意味の他に、グループの一番上に立つ人間というニュアンスが存在する。それに対して、ドイツ語の Kopfという単語の第二義には「丸くて先端にあるもの」が来る。同じ対象物でも言語によって見方はそれぞれである。先に述べた私の経験談も、まさにこれに該当する。

研究所でよく耳にする言葉に「その国の言葉にないものは感じる事はできない」というものがある。3年前にはそれが全く納得できなかった。語彙と感覚とは別次元のものだと考えていたのである。しかしある日ふと、私たちが普段何気なく使用する「照れくさい」、「懐かしい」、「(社会

的地位や評価を表す) 偉い」などの語に完全に当てはまるドイツ語が見つからず、純粹に彼らがそれをどう言葉に表すのか、日々疑問に感じていたことを思い出した。彼らの日常生活の中でそのような語彙は必要ないのではなかろうか。なぜなら彼らはそのような発想で物事を考えないから。同様に、例えばドイツ語に多数のバリエーションが存在する「音が鳴る、響く」、「(酒に) 酔う」、「腹を立てる」を表す言葉にみられるように、ドイツ語話者たちが感じている、私たちの周りで起こる現象や感情の繊細な違いを私たちは感じ取っていないのかも知れない。

ドイツでシュタイナー流ドイツ語教授法を教わり、また同時に日常を通して様々な社会に属するドイツ人からドイツ語のシャワーを浴びる。ドイツ人に驚かされ、憤り、葛藤し、喜び、感銘を受ける。月並みではあるが、それは自国文化と異文化のボーダーライン上に立つ者にとって最も幸せな事である。来独する前に抱いていた以上に強烈なシャワーも多々あるが、ドイツにとどまっていられる間にできるだけ多くのギャップやジレンマを経験し、のちに教育者としてうまくその橋渡し役ができればと思っている次第である。

3. 丸山 恵里香：学校インターンシップ体験記

私は2005年9月から12月にかけて、母校である府立富田林高等学校のインターンシップに参加した。そこで私は、日本語教師としてドイツとデンマークからやってきた留学生に日本語を教えていた。毎週水曜日に英語準備室を借りて、完全オリジナルの授業を行った。私の力不足の授業に、一回も欠席することなく授業を受けてくれたことだけでも本当に感謝の気持ちで一杯だ。今振り返ると、私自身学ぶことが多く、貴重な体験を通して大きく成長できた日々だったと思っている。

インターンシップ初日、ドイツから来日したエリックという名の少年は、こぼれんばかりの笑顔で私を迎えてくれた。その笑顔はあまりに印象的すぎて、今でも私の胸に焼き付いている。今でも彼を思い出そうとすると、そのときの笑顔が真っ先に頭をよぎる。そして彼は私に流暢な英語で自己紹介をしてくれた。そのときにエリックに対して感じた芯の

通った真っ直ぐな姿勢は、そのときから私の授業の原動力となった。彼は来日するまで、ある程度ドイツで日本語を学習していたらしく、平仮名は勿論、カタカナもスラスラと読み書きできるレベルだった。授業では全てが私に任されていたので、オリジナルの授業をすることができた。日本語を楽しく、退屈せずに教える方法はないだろうか、と考えるのが私の毎週課された宿題だった。しかし実際の現場では、考えたことはほとんどうまく進まなかった。というのも、英語でのコミュニケーションが私にとって大きな障害だったのだ。彼はまるで滝のように英語で私に話をしてきたが、私はその大半を理解することができなかった。私が話す英語も理解してもらえないことが多かった。そのとき初めて世界の英語レベルの高さを、身をもって感じた。

日本人にとっては当たり前でも、外国人にとっては疑問の対象になることなんて山ほどある。当たり前のことを説明することほど難しいことはない。しかもそれを英語で彼らに教えなくてはならなかった。私は悪戦苦闘しながらも乗り切るときもあれば、お手上げのときもあった。そのときは本当に情けない気持ちで一杯だった。だから教えてあげたいことがうまく伝わらないことも数え切れないほどあった。けれど、彼は理解しようと一緒に頑張ってくれた。

エリックは向上心の強い男の子だった。彼はどんどん次のステップへ進みたがった。一度、小学校一年生対象の漢字のテストをしたことがあった。あらかじめ練習を積んでからのチャレンジ。彼は自信満々の顔でそれに挑んだ。採点をすると、数個のケアレスミスがあった他はほぼ完璧に、日本人顔負けの文字も書けていて、本当に上出来だと私は思った。しかし、エリックは顔を手で覆って本当に悔しそうな顔をしているのだ。小学一年生レベルのテストに間違いをしてしまったことに対して、彼は大変なショックを受けてしまったのだ。しかもその悔しがり方も普通ではなかった。その日の授業は、もはやもうできないくらいに彼の意気込みは失われてしまったのだ。私と彼の次元が違うことに気づいたのはそのときだった。それからというもの、好奇心旺盛なエリックは、目を見張るほどのスピードで日本語を習得していった。彼の目標は小学校一年生～六年生までの漢字を全てマスターすることだった。まさかと思ったが、彼は本当にそれをやってみせるつもりだった。いや、彼なら留学期

間中にそれをやってのけるかもしれない、と思った。

私は「ドイツ人らしさ」とか「日本人らしさ」という言葉がなんとなく嫌いだ。十人十色、同じ人間なんていない、だから似た特徴を「～らしさ」という大枠で片付けるのはおもしろくない考えだと思う。私は彼と過ごした3ヶ月間、彼を通して見てきたのは背景にあるドイツという大国ではなく、「一人の生徒」としてだった。真っ直ぐな瞳で、目の前の目標を一つ一つこなしていく姿勢に傍で見ていて本当に感心した。教師はよく生徒に何かを教える反面、教えられることの方が多いというが、その言葉の意味が本当によくわかった。言葉の壁を越えて、人間として向き合っていくには何が一番大切なのか。それは言葉の問題ではなく、心の通じ合いが大切なのだと言っ直ぐな瞳はそう語っていた。私は彼と過ごした3ヶ月間を通して、本当に大切なものを得た気がする。これを思い出の中に大切にしまってしまうのではなく、未来の自分への教訓として、大切に受け継いでいこうと思う。

4. 野中梨栄子：心温まる街 ウィーン

2005年の7月。夏の暑さが増し始める頃、憧れの都ウィーンへ旅立った。私には1回生のある授業で興味を抱いてから現在に至るまで温め続けてきたテーマがある、「お菓子からみるドイツ人」。探究心旺盛な私はそのテーマをあらゆる方向から調べ、体験し、それは日常生活まで浸透し今でも大学生活の中心となっている。

このテーマに興味を持ったのはおそらく母の影響だろう。昔から休日にはよく母と姉と一緒にお菓子作りをし、中でもスウィートポテトの仕上げで焼き色をつけるための黄身塗りがお気に入りだった。手作りの温かいお菓子を囲んだティータイムでは普段にも増して高らかに笑いながら他愛もない話をする。私にとってその空間全てが「幸せの象徴」で、高校時代の3年間では日本の繊細な伝統文化の一つである茶道（裏千家今日庵）を通して「もてなしの心」を学び取ってきた。そして大学に入りこのテーマを扱ううちに「人々の心が温まるような場所、いつ来ても変わらない笑顔がそこにあり、ほっと気持ちが安らげるようなサードブ

レイスを提供したい」と思うようになり、昨年の春からコーヒー専門店
で働いている。

そんな「温かいモノづくり」のイメージを中心に膨らませてきたこの
テーマのお陰で私の興味は多岐にわたって広がってゆき、コーヒー専門
店での専門の勉強を通してCafé Kultur (カフェ文化) にも関心が強まっ
ていった。ウィーンへの憧憬の念が強まったのもこの頃からである。ハ
プスブルク家の宝石と謳われ彼らによって築き上げられた華麗な文化、
昔からの古い街並み・建物をそのまま残し多くの知識人を生み出した、
芸術家の街、音楽の都 Wien (ウィーン)。それらの文化とCafé Kultur
はどのように関わりあっているのか、とりわけ「人々にとってCaféとは
どんな存在であるか」を肌で感じ取りたいと考え、ホームステイ・語学
学校でのドイツ語修得も含めひとりこの地へやってきたのだ。

はじめウィーンはカフェも多いことから私の住む神戸と似た街だと思
っていたが、同じドイツ語圏のドイツとも全く異なっていた。ハプス
ブルク家の歴史・芸術が街のいたるところに残っており、伝統を守り続
ける老舗のCaféも変わらずそこにあり、街全体が美術館のようだった。

そんなウィーンでの3週間は今までの人生の中で最も知的な毎日とい
ろいろな出会いに感動の連続だった。授業が午後から始まるのでホスト
マザーHerthaとの朝食後、美術館へ出かけその日の気分合ったカフェ
へ行き、日記・手紙を書いたり本を読んだり思い思いの時間を過ごす。
そして授業(前半文法、後半ディスカッション)に積極的に参加し、帰っ
て晩ご飯を作り課題を済ませた後は、リビングでキャンドルをつけ
Herthaと一緒にコーヒー片手にいろいろなことを語り合い、時には野外
コンサートやフィルムフェスティバルへでかける、そんな毎日だった。

どれも素敵な体験でここにはとても書ききれないが、その中でも特に
楽しみにしていたことはHerthaとの夜のティータイムである。Herthaは
この留学で私にとって一番素敵な出会いだった。Herthaは70歳の一人
暮らしで元小学校の教師をしていた、子ども好きの元気なおばあちゃん
である。初日に家を訪れたとき、通りまで出てずっと私を待っていてく
れていた。自己紹介をすると満面の笑みで抱きしめてくれ、「よく来たね。
疲れたでしょ? 荷物は私が持つから」と言ったので私が「腰が折れる
くらい重いからだめだよ、私持つよ」と言っても、「大丈夫、大丈夫」と

笑いながらその重いトランクを持って離さなかった。そんな優しく可愛らしいHerthaから私はたくさんの愛情をもらった。Herthaとどれ位いろいろなことを話しただろう。1日の出来事、ドイツ語のレッスン、好きな音楽、茶道、ウィーンの歴史、コーヒーの歴史、ハプスブルク家、カフェ文化、そして私の愛する友達・家族のこと。それは時間が止まったような心温まるひとときで、1杯のコーヒーと静かにゆらめくキャンドルが創る空間の中で心の奥深いところまで語り合うことができた。

ウィーンのカフェもこれと同じ居心地の良さがあると思う。1人で静かに過ごしたいときも友達同士で世間話したいときも、1杯のコーヒーがあればそこは自分だけの空間になるのだ。日本のカフェも同じではないかと思うかもしれないが、ウィーンのカフェはどこか繊細なのだ。通りから聞こえてくる管楽器の演奏や歌声、そしてカフェとともに歩んできた長い歴史、それらがウィーンのカフェを情緒豊かにしている。カフェとは「人と人の心が触れ合う場」であり、その「人々」がカフェを創っているのだと思った。

芳しいコーヒーの香り、心に静かに響き渡る音楽、ハプスブルク家が創り上げた芸術の遺産、それらを守りそこに息づいてきた人々。その中で私は最も好きな言葉を見つけた。*einfühlsam*（人の身になって感じることのできる、思いやりのこもった）という言葉である。私の中でHerthaはまさに*einfühlsame Frau*（思いやり深い女性）である。帰国の前日、学校から帰って来ると机の上にそっと彼女からの贈り物が置いてあった。手紙の周りに3人の天使がいた。

Engel mögen Dich auf Flügeln nach Hause tragen und Dich beschützen.

Deine Hertha

天使たちがあなたを翼にのせて家へ運び、あなたを守ってくれますように。

あなたのHerthaより

この温かな出会いに私は心から感謝した。
einfühlsame Frau、そんな女性であり続けたい。